

特 集

「特集：アレルギー免疫治療の最新の進歩」 の序文として

獨協医科大学 内科学（呼吸器・アレルギー）

石井 芳樹

アレルギー疾患は、年々増加している。代表的なアレルギー疾患である気管支喘息は、治療管理の進歩によって増悪や入院、喘息死は減ってきたものの有症率は増加している。花粉症の有病率は30-40%となり、まさに国民病となった。乳幼児の食物アレルギーもこの10年で倍増して問題となっている。このようなアレルギー疾患増加の背景には、衛生仮説と呼ばれるような生活習慣や環境の変化が大きく関わっている。しかし、アレルギー疾患の病態の理解が進むにつれ、治療法も進歩し、アトピー性疾患の根幹に働くIgEに対する抗体も使用可能となった。最近では、アレルゲンをを用いた舌下免疫療法の保険承認が話題となっている。さらに、重症喘息に対する抗サイトカイン療法もたくさん開発されまもなく臨床使用が可能となる予定である。

一方、免疫も多くの疾患の病態の中心となっており、とくに自己免疫疾患である膠原病をはじめ、様々な臓器の疾患に関わっている。免疫病態の理解が進み、病態の鍵となる分子に対する抗体療法など生物学製剤や免疫抑制剤が大きく進歩してきた。膠原病の治療は、完全に抗サイトカイン療法が中心となって大きく変化した。さらに免疫を制御する薬剤の開発は、移植医療にも大きく貢献してきた。

今回の特集では、いかにアレルギーや免疫の病態解明が進み、それに伴っていかに治療が進化してきたかについて、基礎、臨床の各科に原稿をお願いした。まず、アレルギー免疫学の基礎病態の進歩について、免疫学教室より自然リンパ球の話題、解剖学教室より樹状細胞の話題を戴いた。自然リンパ球は、これまでのアレルギー免疫学の説明不能な部分の理解を進めるものと期待されている。また、樹状細胞は、癌免疫療法の中心となってい

るが、樹状細胞の分野での世界的な権威である松野教授からわかりやすい解説を戴いた。臨床については、関連する各領域から気管支喘息の最新治療、ハチアレルギーの免疫療法、アレルギー性鼻炎の舌下免疫療法、アトピー性皮膚炎の最新治療、眼科的アレルギー免疫疾患の治療、小児科食物アレルギー、膠原病の最新治療、移植医療における免疫抑制治療について解説をお願いした。

本特集をみてわかるように獨協医科大学においては、アレルギー免疫領域を得意として診療や研究を行っている科が実に多い。手前味噌とはなるが、呼吸器・アレルギー内科は、日本で初めて設立されたアレルギー専門の教室であり、これまでアレルギー学会をリードしてきた。読売新聞の調査でも獨協医科大学病院の喘息外来患者数は内科小児科あわせて日本最多で近隣の病院とは比較にならないほど群を抜いている。日本では、数少ないハチアレルギー診療にも取り組んでいる。膠原病も多数の患者を診療している。耳鼻咽喉・頭頸部外科は、古くから花粉症の臨床研究に力を入れてきたし、現在は、好酸球性副鼻腔炎にも積極的に取り組んでいる。小児科は、喘息、食物アレルギーで日本小児アレルギー学会をリードしている。眼科や皮膚科もアレルギー疾患に熱心に取り組んでいる。さらに、本学は、第二外科や呼吸器外科をはじめ移植医療を熱心に取り組んでおり、移植免疫の面においてもエキスパートが多い。

このように、アレルギー免疫の診療研究が盛んな環境は、他大学にはあまりなく、本学の誇るべき特色の1つといえる。今後も、基礎と臨床各科の力を合わせて、アレルギー免疫の研究や臨床に取り組み、獨協医科大学の1つのセールスポイントとしてさらに発展させていきたい。